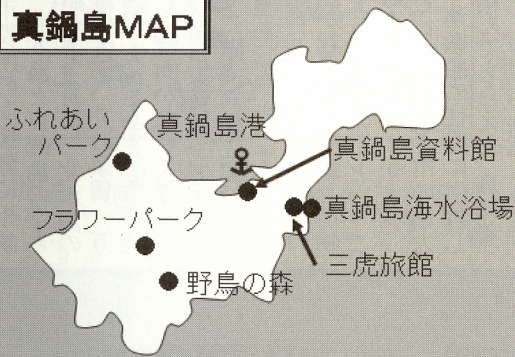




三虎旅館の久一博信さん

目、久一博信さん(43歳)だ。「誰かが究極の手抜き料理と言っていたよ」と笑う。四人兄弟の末っ子で次男坊。東京の大学を卒業し、島に戻ってきた。その日の朝、彼は港へ。漁師が水揚げした活魚を仕入れると、バイクをたくみに操って、狭く急な山道を登り、走り、下った。いかに速く活きのいいまま、旅館の水槽に放すかに命をかけていた。「小さいときから家はユースホテルで、全国から集まった旅人が集まってきた。親父は夜中まで浜辺で旅人と話していたな。」  
島の同級生十六人のうち今、島で生きるのはひとりだ。

### 真鍋島MAP



真鍋島は手つかずの、これからのリゾートだと思ふ。島で老後暮らすには、こたわりや自分の好きなことを持っていること。少し収入があり、半農半漁田舎暮らししたい人に向きそう

だ。転進した。真鍋島は手つかずの、これからのリゾートだと思ふ。島で老後暮らすには、こたわりや自分の好きなことを持っていること。少し収入があり、半農半漁田舎暮らししたい人に向きそう

## 真鍋島(笠岡諸島・笠岡市)

### 手つかずのリゾート

おそよ まやん

瀬戸内海に面したベランダで海風に抱かれながら、読書するのもよし、釣りをするのもよし、昼寝するのもよし。至福のときが過ぎていく。

瀬戸内海笠岡諸島の真鍋島(笠岡市)は私のお気に入りの島だ。年末年始や五月の連休などに何度も通っている。が、高齢者の多い島だ。その日笠岡港近くに車を止め、暗くなつた棧橋で海上タクシーを待つことにした。週末の二泊三日をフルに真鍋島で過ごしたかったのだ。海上タクシーに乗り、港ではなく、宿の棧橋まで直接に行つてもらつた。所要二十五分。こんな贅沢もたまにはいい。老後をこの島で暮らせたいものかと密かに思つてきた。ライフランは整備されているのに、空き家がいっぱいだ。夏みかんや菊な

どの畑の間に作られた人一人歩ける急な坂道を歩くことが基本で公共の乗り物がない。店も数軒だけ。

かつて花の島と言われたのに、花を育てる後継者がいないという。一見、魅力薄には見えるが、気候はいいし、魚は釣れる。遊休畑がたくさんあるから、南仏プロヴァンスのようにラベンダーやハーブ、てオリブなどを栽培し、自給自足、田舎暮らし、スローライフを実現できるだろう。畑の作り方は島人に聞けばいいし、生活用品は、笠岡までいけば大きなスーパーマーケットで買える。私の定宿は三虎(さんとら)旅館という。昭和四十年に取り壊し



連絡船から真鍋島を望む



真鍋島船着き場での老カッパ

彼は物作りが好きだ。花を植えた、ベランダを作ったり、棧橋をつくったり。海に面した塩の露天風呂も作品だ。  
私が乗った海上タクシー「幸進丸」の船長、山本武志さん(46歳)は船を少しずつ大きいものを買換えてきた。彼は卒業後、笠岡市で電気製品の修理の仕事をしてきたが、漁師である父がローラに腕を巻き

込まれて骨折。23歳のときに島に戻り、父の代わりから、そのまま漁師になった。小さな船を買って操業。ある日、投光機を海に向けて走つたところ、魚群にあたった。必死で手網ですくいあげることを繰り返して、夢中で市場へ運んだ。それから十年は、瀬戸内海を相手に船で走り回り、魚群を探し当てて焚き寄せ漁にはまった。「まるでばくちみたいにおもしろかったよ。」一晩であじ、さば、いわしなどが六トンから十トンもかかる日もあった。

しかし、瀬戸大橋ができて、潮の流れが変わり、魚群が来なくなつた。海が大好きで、海を相手に仕事をし





岡山県西南端、広島県と接する笠岡市は瀬戸内海に約30の島々を有している。人々が居住しているのは、高島、白石島、北木島、大飛島、小飛島、真鍋島、六

島の7島である。これらの島々は、かつて石材業、海運業、漁業などで栄え、昭和30年代には人口一万人を超えていた。しかし、経済構造の変化などで、現状の人口は

## おかやまの味 笠岡市

### 離島振興を 味にたくして

# しまべん

三千人台にまで減少し、また、高齢化も急速に進んでいる。笠岡市役所の「島おこし海援隊」は、このような状況を改善し、離島振興を推進する組織として平成13年に市長の特命により設置された。

海援隊の活動は、定住支援などの他、各島のコミュニティの強化や医療福祉の向上など多岐にわたっている。

「しまべんプロジェクト」は、こうした活動の一環として生まれたものである。駅弁で、その町の名産が旅先で容易に味わえるように、「しまべん」も各島の新鮮な素材をお弁当にした、多くの人に手軽に味わってもらい、アピールしたいというプロジェクトである。

その契機となったのは、平成17年4月のNHK「BS」の番組取材である。それぞれの島の有志が自腹でその島の「しまべん」を開発し、同年5月29日、NHKの番組「おーいッポン」私の好きな岡山県で島を巡って食べる光景が放映された。「しまべん」誕生の日である。

【メモ】  
「しまべん」ラインアップと注文は  
URL <http://www.shimazukuri.gr.jp/shimaben/menu/menu.htm>  
申込み予約先: 島づくり海社(守屋)  
TEL 090-5374-1333

【参考資料】NPO かさおか島づくり海社  
URL <http://www.shimazukuri.gr.jp/>

それが、新しいビジネスへと発展していった。現在、毎週土曜日に笠岡市で開催されている「笠岡鮮魚市」で定期的に販売されるなど、陸部での販売も広がっている。

事前に予約すれば笠岡港や各島の港でも受け取りができる、島の散策のお昼にはうつつけ。平成18年4月には真鍋島に、「しまべん」を販売するマナコッチハウスがオープン、ちよつと休憩し、「しまべん」を味わうこともできるようになった。(柳沢道生記)

## コラム



愛犬とくつろぐ金政さん

くと、港からは、十  
四、五人の人がリ  
ヤカーを押したり  
して手伝ってくれ  
た。「たった一人が  
食べるだけですか  
ら、なんともなり  
ます。できれば自  
給自足をめざした  
のです」

## 【出会い】

### 真鍋島の新住民第一号 金政哲夫さん

金政哲夫さん(71歳)は六月一日に引越してきたばかりだ。家は、港から山側に三分ぐらい歩いたところにあった。金魚を入れた大きな水槽が三つ、それにマックスという犬を連れて倉敷近くの県営住宅から単身引越してきた。若い頃は建具職人だった。子育ても終わったし、悠々自適、どこか、のんびり暮らせるところはないか。犬と一緒に田舎暮らしをしてみたい、

と笠岡市役所の海援隊に相談すると、北木島と真鍋島の空き家を二軒紹介された。北木島のほうは港に近く、月の家賃一万円だったが、大きすぎる家で、一人暮らしには向かないと思った。真鍋島の家も家賃は一万円。二階建てで二階に六畳二間、一階にも二室あつて、キッチン、トイレ、風呂付だ。ここに決めた。が、問題が起った。引越し荷物をどのように運ぶか、ということだ。船をチャーターすると、十万円ぐらいかかる。市の協力で、ゴミ運搬船の往路に引越し荷物を積んでもらえた。島に着

## DATA

交通: JR 笠岡駅下車。徒歩約3分で笠岡港に着く。ここから三洋汽船で真鍋島まで。  
問合せ: 三洋汽船 TEL 0865-63-3131  
片道運賃: 普通船 760円、高速船 1360円  
海上タクシー「幸進丸」TEL 0865-68-4345  
真鍋島まで10人まで片道 10,000円

宿泊 三虎旅館 笠岡市真鍋島2224

TEL 0865-68-3515

料金 10,500円~

URL <http://www.oka.urban.ne.jp/home/suntora/>

## 永住

ただ家を貸すのではなく、「島での新しい生き方を提案」という新住民受け入れの取り組みが笠岡諸島で進んでいる。この2年間に8世帯が移住してきた。

・問合せ: 笠岡市政策部協働のまちづくり課 海援隊グループ TEL 0865-68-3741  
URL <http://www.shimazukuri.gr.jp>

観光情報 笠岡市産業振興課

TEL 0865-69-2147

・笠岡市のURL

<http://www.city.kasaoka.okayama.jp/>

・真鍋島のURL

<http://www.city.kasaoka.okayama.jp/manabehp/manabe.htm>